

■ 解答・解説

問1 「のたまひ」＝尊敬語（「言ふ」の尊敬語「のたまふ」。お言いになる・おっしゃる）。「申し」＝謙讓語（「言ふ」の謙讓語「申す」。申し上げる）。身分の高い主君・義仲の動作には尊敬語「のたまふ」を、家来である兼平が主君に向かって言う動作には謙讓語「申す」を用いることで、語り手が二人の主従の上下関係を敬語で表し分けている。

問2 「のたまひけるは」＝義仲（木曾殿）。「今井四郎申しけるは」＝兼平（今井四郎）。尊敬語「のたまふ」が主君義仲、謙讓語「申す」が家来兼平に対応している点からも判断できる。

問3 〈訳〉ふだんは何とも感じない鎧が、今日は重くなったことよ。〈心情〉味方をほとんど失い、孤立して気力をくじかれた義仲の弱気・心細さが表れている。直後に兼平が「臆病でこそさはおぼしめし候へ（気おくれしているからそうお思いになるのです）」と励ますことから、義仲の弱音だとわかる。

問4 〈敬語の種類〉尊敬語。〈敬意〉話し手である今井兼平から、主君である木曾義仲への敬意。〈文法〉「させ」は尊敬の助動詞「さす」の連用形、「たまは」は尊敬の補助動詞「たまふ」（四段）の未然形で、二重敬語（最高敬語）になっている。下に打消の助動詞「ず」が付き、「お疲れになっていらっしやらない」の意。

問5 「御（おん・み）」は尊敬の意を表す接頭語で、その語の指すものが高貴な人（ここでは主君義仲）に関わることを示し、敬意を添える働きをもつ。「御着背長」は、大将など身分の高い武将が着る鎧（よろい）を敬つていう語で、ここでは義仲の鎧を指す。

問6 (ア)已然形。(イ)係助詞「こそ」。「こそ」を受けて文末の「候ふ」が已然形「候へ」で結ばれている（係り結び）。

問7 〈訳〉兼平一人がお仕えしておりますも、ほかの武者千騎（がいのの）とお思ってください。〈人物像〉最後まで主君を見捨てず、自分一人を千人の武者にも匹敵する力と頼んでよいと言いきる、忠義に厚く豪胆な武士。主君を励まし、立派な自害の場へ送り届けようとする一途な忠誠心がうかがえる。

問8 〈訳〉矢が七つ八つございますので、しばらく（敵を）防ぐ矢を射しましょう。「仕る」は「す（為）」の謙讓語（「いたす」の意）で、兼平が主君のために戦う行為をへりくだって述べている。

問9 「駆けたまふ」「振り仰ぎたまへる」の主語は、いずれも木曾義仲。「たまふ・たまへ」は尊敬の補助動詞で、義仲の動作に敬意を添えている。

問10 日が沈むころ＝夕暮れ時（夕方）。「入相」は日の入りのころをいい、「入相ばかり」で「夕暮れどき」ほどの意。

問11 深田にはまり込んだ義仲の馬が、あおってもあおっても、（鞭で）打っても打っても、（もがくばかりで）前へ進まなくなった様子。「あふる」は馬の腹を蹴って急がせること。主語は「（義仲の乗る）馬」。

問12 木曾義仲。石田次郎為久に内甲を射られて深手を負ったのは義仲であり、馬の頭に顔を当ててうつ伏せになったのも義仲。直前の主語が義仲のまま続いている点に注意（兼平はこのとき別の場所で戦っている）。

問13 完了（強意）の助動詞は「つ」（「て」は連用形＝「て」＋「んげり（けり）」）。〈訳〉（石田の郎等二人が落ち合って、）とうとう木曾殿の首を取ってしまった。

問14 〈訳〉今は誰をかばおうとして戦などするだろうか（いや、もう戦う意味はない）。〈理由〉守るべき主君義仲が討たれてしまった以上、もはや戦い続ける理由がなくなったから。「か…べき」は反語で、戦う必要のないことを強調している。

問15 太刀の先（切っ先）を口にくわえ、馬から逆さまに飛び落ちて、その太刀に体を貫かれて死ぬという、壮絶な自害のしかた。敵に首を取らせまいとする、武士としての誇り高い最期を「手本」として見せたのである。

問16 「貫かつてぞ失せにける」…係助詞「ぞ」／結び「ける」（連体形）。「さてこそ栗津のいくさはなかりけれ」…係助詞「こそ」／結び「けれ」（已然形）。

問17 (ア)軍記物語（軍記物・戦記物語も可）。(イ)無常観（諸行無常）。(ウ)琵琶法師。

補足：『平家物語』は鎌倉時代に成立した軍記物語で、平家一門の栄華と滅亡を「盛者必衰」「諸行無常」の仏教的無常観のもとに描く。文字を読めない人々にも、琵琶法師の語り（平曲）によって広く伝えられた。

問18 (ア)「思ふ」。(イ)(…と)お思いになる／お思ってください。「おぼしめす（思し召す）」は「思ふ」の尊敬語で、ここでは家来兼平から主君義仲への敬意を表す。

問19 正月二十一日の夕暮れで、田には薄い氷が張っていた。そのため、その下が深い泥田（深田）になっているとは気づかず、義仲は馬をぎつと乗り入れてしまい、馬の頭も見えないほど深くはまり込んでしまった。

問20（解答例）兼平は自分一人を千騎の力と頼めと励まし、義仲を立派に自害させようと栗津の松原へ送り出す。だが義仲が討たれると、守るべき主君を失った兼平は戦う意味をなくし、武士の手本として壮絶な自害を遂げる。最期まで主君を思う、固い主従の絆が描かれている。（約九十字）

問21 (ア)軍記物語（軍記物）。(イ)勢いの盛んな者も必ず衰えるという道理。今は栄えている者でも、いつかは必ず滅びるということで、平家一門の繁栄と滅亡を貫く無常観を表している。

問22 ア・イ（徒然草＝鎌倉末期、方丈記＝鎌倉前期）。ウの源氏物語とエの枕草子はいずれも平安時代の作品なので誤り。
